



## 矢尾次郎先生 : 人と学問(矢尾次郎博士記念号)

石垣, 健一

---

(Citation)

国民経済雑誌, 142(4):133-150

(Issue Date)

1980-10

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/00172544>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/00172544>



# 矢尾次郎先生——人と学問

石 垣 健 一

## I

矢尾次郎先生は昭和55年4月1日神戸大学を定年退官され神戸大学名誉教授になられた。

矢尾先生は大正5年5月24日福井市に誕生、名古屋高等商業学校を経て、昭和12年4月神戸商業大学に入学、同15年3月卒業後直ちに神戸商業大学助手に就任、同21年6月神戸経済大学助教授、同27年7月神戸大学神戸経済大学教授を経て、同28年4月神戸大学教授（経済学部）に任ぜられた。助手就任から本年の退官まで実に40年の長きにわたり、神戸商業大学、神戸経済大学ならびに現在の神戸大学において、研究と教育と大学行政に尽力してこられた。

矢尾先生は、その在任中、金融経済論講座の担当教授として常に一貫した方法と体系に基づき、研究と教育に献身された。その研究は、貨幣論、金融経済論、金融政策の各分野において緻密な思索と論理に裏づけられた数多くのすぐれた著書と論文を発表され、学界に多大の貢献をなされた。このような研究活動とともに、先生は学部学生および大学院生の教育にも熱心に取り組まれ、数多くの人材を育成してこられた。先生の門をたたいたゼミナリストは学部・大学院を合わせて441名の多数に達し、その多くは社会の各分野の第一線で活躍中である。

矢尾先生は、また、大学行政についても大きな貢献をなされた。昭和40年6月から同42年まで神戸大学評議員として大学の管理運営に貢献されたほか、昭和45年6月から同45年11月まで神戸大学経済学部長事務取扱、同45年11月から同47年11月まで神戸大学経済学部長、同45年6月から同47年11月まで神戸大学

大学院経済学研究科長として、学園紛争後の同学部、同研究科における教育・運営の正常化と改革に尽力されるとともに、同50年10月から同53年10月まで神戸大学附属図書館長として図書館の充実に努められた。さらにまた先生は昭和28年4月から同55年3月まで神戸大学経済経営研究所の兼任教授として研究所の発展のために多大の貢献をしてこられた。

対外学術活動としては、長年にわたって金融学会の理事として学会発展のために指導的役割を果たされ、また日本学術会議会員（第9期）としてわが国の学術振興に寄与された。先生は、また神戸大学金融研究会の中心メンバーとして活躍される一方、日本銀行特別研究室の金融研究会のメンバーとして日本の金融政策理論の確立のために力を尽くされている。

矢尾先生が神戸大学においてこのように研究と教育と大学行政に献身された40年間は、第2次大戦、戦後の混乱、高度経済成長、オイル・ショック等々の大きな社会的・経済的変動に加えて、戦後の大学制度の改革や学園紛争の勃発などが生じた日本の社会にとっても大学にとっても激動の時代であった。まさに先生は「40年間の長きにわたり戦前から戦後にかけての昭和の歴史を神戸大学と共に歩んでこられた」（最終講義における新保 博経済学部長の挨拶）のである。

このような矢尾次郎先生の研究過程とその学問体系を全体的・統一的に把握し、それを跡づけることは浅学非才な筆者にとっては容易なことではなく、先生の意図を十分に汲み尽くせず、不完全な粗描となったことを恐れ、深く先生のご寛容をこわなければならない。

## II

矢尾先生と経済学との出会いは昭和9年の名古屋高等商業学校への入学に始まる。当時の名古屋高商では宮田喜代蔵先生、赤松 要先生、高島佐一郎先生、酒井正三郎先生など、日本の経済学会に中心的地位を占める諸学者が教鞭をとっておられ、学校の雰囲気はきわめて学問的な香りの高いものであったとのこ

とである。先生は宮田先生からはドイツ名目学説の展開としての貨幣論を、高島先生からは管理通貨制の史的発展を踏まえた金融論を学ばれるとともに、赤松先生のゼミナールに所属されてアダム・スミスの『国富論』の翻訳版の輪読を通じて学問の厳しさを学ばれた。先生は勉学に励まれると同時に、弁論部に所属され、「赤字公債論」という演題で各地を講演されて歩かれたそうである。

先生が名古屋高商卒業後、神戸商業大学進学を選ばれたのは、当時金融学者として令名高かった田中金司先生の学風に魅かれたことと、幼年時代の一時期を神戸で過ごされた関係でこの地に親近感を持たれておられたことからであった。先生は一年生のときに商業研究所（現経済経営研究所）の懸賞論文に応募され、「わが国コール市場の研究」で当時では珍しい第二席に入賞されている。審査に当られたのが田中先生と新庄 博先生であったこともありこの論文入賞は先生の学生時代の忘れられない思い出のひとつであろう。

先生は二年生のときのゼミナール選択にあたって、「きわめて自然に」、名古屋時代から私淑されておられた田中先生の門をたたかれた。先生は当時多くの研究者の関心を集めていた貨幣的景気理論、とくにウィクセル、ミュルダールなどのスウェーデン学派の研究に進まれ、その成果を卒業論文「均衡理論と貨幣理論」にまとめられた。他方、先生は新庄先生のネオ・メタリズムの立場に立つ貨幣論の講義を聞かれ深い感銘を受けられた。このときから貨幣本質論をめぐる先生の学問的遍歴が始まったのである。

昭和15年春卒業と同時に、田中先生のご推薦により助手として母校に残られた。助手就任とともに、学生時代より興味を持っていた貨幣的経済理論の本格的研究をいよいよ始められたのであるが、その研究過程で先生は、田中先生、新庄先生、および名古屋高商から移ってこられた宮田先生の三先生から多くのことを学ばれている。田中先生からは重厚にして着実なる学風を、新庄先生からは鋭利にして透徹した分析の学風を、そして宮田先生から整然とした総合の学風を、学び取られたのである。

その当時、先生のその後の学問的方向に強い影響をもたらしたひとつの出来

事があった。それは名古屋高商時代の恩師の一人であられた高島先生が来神され、金融論講座の助手として残られたばかりの矢尾先生に対して、金融論の勉強を始めるに先立ってマーシャルの研究を勧められたことである、先生はこの勧めに従って、まずマーシャルの大著『経済学原理』に取り組まれたが、その研究はおのずからスミス、リカードゥ、マルサスとイギリス古典派経済学へさかのぼっていった。そしてこの古典派経済学の研究は、金融論を単に金融の分野の問題としてだけではなく、経済全体のなかに金融を位置づけ、実体経済と貨幣・金融との関連を明らかにしようとする矢尾先生の学問向上の基本的態度の形成に大きく役立ったのである。

先生は昭和17年に処女論文「ケインズ乗数理論について」（掲載雑誌，発行年月日，その他は文献目録参照）を発表されている。この論文は坂本弥三郎先生を中心にされたケインズ『一般理論』の研究会に先生も出席されて研究された成果である。当時はすでに食糧事情が悪化し始めており，先生は校閲をお願いした坂本先生のお宅で配給のパンをともにかじりながら最終稿の作成を行なわれたのである。

矢尾先生は昭和19年3月に「財の世界と貨幣の世界」を発表されてから昭和25年1月に「貨幣的利子理論の諸類型」を書かれるまで，その間に一本の論文も発表されていない。この期間は言うまでもなく第二次大戦末期から敗戦，そして戦後の混乱期に至る時期であり，日本人全体が塗炭の苦しみを味わった時代であるが，先生も召集兵としての佐世保海兵団への入隊，疎開先の福井での空襲による戦災，戦後の食糧難など大きな苦勞をなされている。それにもかかわらず，先生はこの間にも貨幣的経済理論と古典派経済学の研究を続けられており，その間の貨幣的経済理論の研究の成果をまとめられたのが昭和25年刊行の『物価理論の研究——貨幣作用の分析——』である。この著書は学界のきわめて高い評価を受け，これによって先生は金融学者としての地位を確立されることになったのである。

他方，古典派経済学の研究は先生に学問上のバックボーンを与えたのである

が、その研究成果を直接的に発表されることはほとんどなく、わずかに「マルサスとケインズ」、「貨幣の価値尺度機能——リカードゥによせて——」にその学識の深さの一端を示されているのみである。しかしこれらの論文、とくに後者は名目主義と金属主義とを価値尺度機能の観点から論じたもので、矢尾先生の最終的に到達された独得の貨幣本質観、すなわち金属主義の考え方をぎりぎりまでとり入れた名目主義的貨幣観が明確に示されている。新庄先生が「ミイラ取りがミイラになりましたね」と評されたのがこの論文である。

先生は『物価理論の研究』の公刊後ますます貨幣的経済理論の研究を深められ、その研究成果を世に問われたのが昭和37年刊行の『貨幣的経済理論の基本問題——貨幣経済の構造と貨幣の作用——』であり、この著書によって先生は学位を授与された。先生は名著の誉れ高いこの著書の大部分を留学先のロンドンで書き上げられた。当時のロンドン大学にはR. S. セイヤーズ教授をはじめ、プレスネル、デイ、クラムプ、オッパイなど金融論の専門家が活躍中であったが、特にセイヤーズ教授はラドクリフ報告作成の中心人物であり、先生の学問的関心と同報告の内容とが合致していたこともあって、同教授と親しく定期的にしばしば討論の機会をもたれた。この著書、とくにラドクリフ報告に関する部分はこのような背景のもとに書き上げられたものである。

先生はこの著書の執筆後次第に金融政策論に力を注がれるようになられる。貨幣本質論→貨幣的経済理論→金融政策論という先生のご研究の流れは論理的にしてかつ自然なものであり、いよいよ先生のご研究が総合化、体系化されてひとつの学問体系として完成の域に近づきつつあることを示すものである。

矢尾先生の研究過程を概観して感じることは、先生がまことにすぐれた恩師の諸先生、学問上ではそれぞれ独自の体系を持ちながらも人間的にもまことにすぐれた恩師の諸先生を持たれておられるということである。見解を異にする学説に対しても正確な理解の上に立って、すぐれた点を出来るかぎり自己の体系の中にとり入れようとなされる先生の学問上の態度や温厚で誠実なお人柄は、矢尾先生がこれらの先生方から学びとられ、それに先生の持って生まれた資質

とご努力が加わって作り上げられたものであると思われる。余談ではあるが、本稿執筆の件で先生の研究室を訪問した際、先生が神戸大学で研究生生活を送られたことをしみじみと喜んでおられたことが筆者には強い印象として残っている。

他方、矢尾先生は、このようにまことに豊かで充実した研究生生活のなかで、先生を取り巻く研究者、門下生に常に大きな学問的刺激を与えてこられている。先生は自らを飾り、自らを語ることによってではなく、常に学問によって、自らの学問に対する態度によって人間の生き方や研究者としての在り方を示されてこられた。先生のこのような態度は、そのお人柄と相まって、先生に接する機会を持ちえた学生、院生、研究者の人びとに大きな教訓と示唆を与えてくれている。教育とはこのようなものなのであろう。

次節以下では、矢尾先生の学問体系を、貨幣論、貨幣的経済理論、金融政策論の各分野から概観する。もとより先生の学問上の業績はこれらの分野に限られてはいない。先生は貨幣制度、銀行論、戦後日本の金融構造と資本蓄積などの諸分野においてもすぐれた業績を残されており、しかもこれらの分野のご研究は上記の三分野のご研究と有機的に関連しているのであり、本来ならばこれらの諸業績を含めて先生の体系として概観すべきであるが、あえて筆者が上記の三分野をとり上げたのは、この三分野こそが先生の学問体系の骨格をなすものであると考えるからである。

### III

矢尾先生は貨幣論上はいわゆる名目主義の立場に立たれ、貨幣の本質を「一般的購買手段を媒介とする一般的交換手段」（『物価理論の研究』）として規定される。貨幣は、企業と家計、生産と消費、財の世界と貨幣の世界とに分裂対立する貨幣経済において、具体的、現象的には生産財市場における生産財と貨幣の交換、および消費財市場における貨幣と消費財との交換という機能（一般的購買手段）を果たすとともに、国民経済的には家計と企業の間を循環しながら

ら生産財と消費財との交換を媒介とする一般的交換手段なる国民経済的職能を遂行するものとされる。この貨幣の国民経済的職能によって、分裂対立の地位に置かれた企業と家計、生産と消費、財の世界と貨幣の世界は意味論的に結合されて、貨幣経済の全体的構成にまとめあげられるとされる。

先生はこのいわば貨幣本質観→貨幣経済の構造という観点の他に、貨幣機能観→貨幣の干涉的作用という別の観点を持っておられ、この両者の結合によって貨幣経済の構造の把握と貨幣の作用分析を行なおうとされる。貨幣機能観→貨幣の干涉的作用という観点からいえば、先生は貨幣の購買手段としての機能の他に貨幣の価値貯蔵手段としての機能を重視される。この機能の重視は、先生をケインジアンたらしめる基盤のひとつを構成するものである。

先生のこのような名目主義的貨幣観は、資本主義的貨幣経済の本質構造を企業と家計とをふたつの対極とする財の世界と貨幣の世界との二面的対応関係と規定し、貨幣経済の本質的構造および変動構造における貨幣作用の分析とその体系化を学問上の課題とされてきた矢尾先生の理論上の基底となるべきものであるが、このことは先生が名目主義に対立する金属主義学説を頑迷回陋の説として排斥されたということの意味するものではない。先生は卓越した金属主義者であられた新庄先生との学問的交流を通じて金属主義学説に対する深い理解を持たれ、その理解のうえに自己の名目主義的貨幣観の内容を拡大し、かつ深められたのである。先生は、「貨幣の価値尺度機能——リカードォによせて——」という論文において名目主義と金属主義を価値尺度機能の観点から論じられた。貨幣論における金属主義は貨幣それ自体価値ある商品であるべきと主張し、名目主義は貨幣の商品性を否定するのであるが、先生は貨幣の交換媒介機能に関しては両者の間に真の対立点はないとして、世界経済を流通の場とする世界貨幣がなお金でなければならないことは名目主義も否定することはできないとされる。両者の貨幣の商品性をめぐる真の対立は貨幣の価値尺度機能にあり、貨幣と金との関係をいかにみるかに名目主義の最も深き反省を要すべき点があるとして、名目主義学説があまり考慮を払わない貨幣の価値尺度機能につ



いて深い考察を行なわれた。

先生によれば、貨幣の価値尺度機能は価値と価格の両面にわたり、価値測定機能と価格表示機能の両者を含まねばならないが、名目・金属両学説を分かつ分水嶺は価値面における測定尺度をいかにみるかにあるとされる。金が価値尺度であり、金を中心として諸商品の相対的価値関係が成立し、金に与えられた貨幣価格を通じて金を中心とする相対的価値体系が貨幣価格体系に転換されるとする金属主義に対して、先生は名目主義の立場から貨幣の価値および価値尺度機能をつぎのように規定される。貨幣の流れは国民生産物の生産面に発し消費面に至る貨幣所得の循環として実物面の循環を支えるという貨幣経済の基本構造により、「貨幣の価値は、国民生産物の価格水準の反面としての貨幣のいわゆる所得価値」であり、その所得価値は「国民生産物を構成する任意の一商品を経準とする交換価値体系を通じて総計せられる国民生産物（標準財表示）と貨幣所得との対応関係によって」決定されるとされる。

このような貨幣の価値規定に立って、先生は貨幣が価値尺度機能をいかに果たすのかを問われる。交換価値を問題にする場合、各商品はいずれも他商品に対して価値尺度財として機能するが、貨幣が価値尺度機能を果たすためにはふたつの道、すなわち貨幣が自ら商品として価値尺度機能を営むか、あるいは任意の一商品を補助的価値尺度財とし、それへの支配を通じて価値尺度機能を行なうかのいずれかの道しかないとされる。前者を選ぶものが金属主義であり、後者を選ぶものが名目主義である。先生は価値尺度機能を果たすものは一義的に金でなければならないことはなく、補助的価値尺度財としては金をも含めた任意の商品でよいとされる。この補助的価値尺度財の任意性は一般的交換手段の一般性と言うことに他ならないが、しかし貨幣の価値が金の一定量に結びつけられる「制度ないし政策」がとられる場合には金を補助的価値尺度財とみなしうるとされる。

しかし、このことは先生が名目主義の立場を捨てられ、金属主義を採られたことを意味するものではない。なぜなら金が補助的価値尺度機能を果たしうる

のは世界経済の交換社会としての未成熟性のため「制度ないし政策」によって貨幣単位の価値が金の価値に結びつけられているからにすぎず、本質的には任意の財を補助として営まれ得る貨幣の価値尺度機能が金を補助的価値尺度とするのであって、その逆ではないからである。

金属主義のすぐれたる諸点を採り入れながら、長い学問的思索の末に最終的に到達された矢尾先生の立場はつぎの文章に最もよく示されている。「名目主義の本質は貨幣が実体価値をもつことなく、交換手段・価値尺度の両機能を営み得ると見る点に存する。金属主義では貨幣は自ら価値を内包する商品（金）たる資格においてのみ価値尺度たり得ると見るのに対して、名目主義では実体価値なき貨幣が商品への支配を通じて価値尺度として機能し得ると見るところに両者の違いは依然として残る。而して金属主義が貨幣に商品性を要求する根本的理由は、交換価値の究極的規定者を投下労働に求め、投下労働こそ価値の内在の尺度にして、貨幣は労働をその実体として内に含むことによってのみ価値尺度たり得るとする投下労働価値説に基づくものと云い得るであろう。」ミイラ取りは結局はミイラ自体にはならなかったと解すべきであろう。

#### IV

貨幣的経済理論—貨幣経済の構造と貨幣の作用—の研究が矢尾先生の学問体系の骨格をなすものであることは誰しも認めるところであろう。貨幣的経済理論についての先生のご研究の最初の成果は『物価理論の研究』に示されている。先生はこの著書のなかで、貨幣経済における諸現象は物価現象も含めてすべて貨幣経済を発現の場とするがゆえに、貨幣経済の本質的構造と変動構造、すなわち貨幣経済を構成する客体的二要素たる財と貨幣の本質的関連と動態における財と貨幣との作用関連をいかに把握するか、換言すれば貨幣経済観のいかんが貨幣経済的諸現象の分析の違いを生ぜしめるとされる。この貨幣経済観・貨幣作用の分析はさらにさかのぼれば、貨幣の本質および機能をいかにとらえるかの貨幣観の違いによって規定されるとされる。先生は貨幣観→貨幣経済観＝

貨幣作用分析の型という規定関係，すなわち貨幣本質観→貨幣経済の本質的構造→貨幣の経済構成的作用という貨幣経済の本質的側面と貨幣機能観→貨幣経済の変動構造→貨幣の干渉的作用という貨幣経済の動態的側面の両者から構成される規定関係を座標として，貨幣数量説にはじまる物価理論の諸類型——貨幣数量説，貯蓄・投資分析法，雇用理論的物価理論——を配置し，その展開を跡づけておられる。

先生が『物価理論の研究』のなかでとられた貨幣的経済理論に対するこの視角——名目的貨幣本質観に基づく貨幣経済の本質構造の把握と貨幣機能観を手掛りとする貨幣作用の分析——は，それ以後の諸研究においても先生が採用された基本的視角であり，先生の学問体系の方法論的基盤を構成するものである。この意味においても，『物価理論の研究』は，名著『貨幣的経済理論の基本問題』の母胎となったものであり，先生の学問体系を語るとき，きわめて重要な位置を占めるものであるといわねばならない。しかし先生の長年にわたる貨幣的経済理論に関するご研究の成果が総合的かつ体系的に最もよく示されている著書が『貨幣的経済理論の基本問題——貨幣経済の構造と貨幣的作用——』であることは皆等しく認めるところであろう。

この著書において，先生は金融論ないし金融経済論のあるべき理論体系としての貨幣的経済理論の展開を貨幣経済の把握方法および貨幣作用の分析というふたつの観点に基づいて検討される。その研究の主要内容は副題の示すように「貨幣経済の構造と貨幣的作用」であり，全体が三編，すなわち第一編 貨幣的経済理論の展開——ウィクセルからケインズ『一般理論』まで——，第二編 貨幣経済の把握方法——Social Accounting，第三編 貨幣作用の分析（そして第二編および第三編はともにケインズ『一般理論』以後の展開という副題をもつ），から構成されている。

第一編において，先生はウィクセルに始まる貨幣的経済理論は伝統的な貨幣数量説に対する批判とその克服として展開されてきたとされて，その検討を行なわれた貨幣数量説の基本的構想を貨幣経済の無差別総計的把握と貨幣パール

觀の二点に求められる。しかしこのような基本構想をもつ貨幣數量説をもってしては、現実の貨幣經濟とそこにおける貨幣の積極的作用を分析することができないとされ、ウィクセルからケインズ『一般理論』までの貨幣的經濟理論が、貨幣經濟的循環の理論であるとともに、生産の貨幣的理論であると性格づけられたうえで、上記のふたつの観点から貨幣的經濟理論の展開が跡づけられるべきだとされる。

まず先生は貨幣經濟の把握方法という観点から、ウィクセル、ハイエク、『貨幣論』のケインズ、『一般理論』のケインズの諸理論の検討を通して貨幣經濟の循環構造的把握の内容と特徴を抽出し、循環構造的把握の貨幣作用分析へのつながりをつけられる。つぎに、貨幣作用の分析の観点から、ウィクセルの累積過程、ハイエクの生産構造伸縮、『貨幣論』におけるケインズの価格水準決定機構、を貯蓄・投資の物価理論として把握し、そこにおける貨幣作用の分析をケインズの『一般理論』における貯蓄・投資の所得理論と対比させられる。とくに後者において、マネー・イルウジョンと貨幣貨金の硬直性の想定とを労働供給関数に持ち込むことによって、労働市場の封鎖性と独立性を破り、雇用と生産の水準の決定に対する貨幣的要因の積極的介入の地盤が開かれるとともに、完全雇用の自動的実現の必然性が否定され、貨幣の価値貯蔵手段としての特異性に基づく利子率の下方硬直性のゆえに不完全雇用均衡が成立することを強調される。

第二編においてはケインズ以後の貨幣經濟の把握方法として社会會計の手法による国民所得勘定、流動性分析、マネー・フローの分析等の方法の比較検討を行ない、貨幣經濟の実証的計量的把握方法のあるべき姿は国民所得勘定体系と一体化されたマネー・フロー分析体系であり、かつそれは国民資本ならびにその金融構造を示すものとしての金融的資産・負債構造のストック分析によって補完されたものでなければならず、これによって財と貨幣の両面にわたるとともに、經濟循環を内容とする上部構造と国民資本を基礎とする下部構造の両者をとらえる貨幣經濟の全面的にして立体的な把握が可能とされ、貨幣經濟の

単なる量的表示を超えた真の分析に進み得るものとされる。

第三編においては、貨幣作用の分析の観点から『一般理論』以後の展開をとり上げ、貨幣の作用経路および貨幣の作用根拠のふたつの問題が論ぜられている。貨幣的要因がいかなる経路を経て経済実体に積極的影響を及ぼすかの問題であって、貨幣作用の利子率経路および流動性経路のふたつが解明されている。とくに後者の問題については、先生はケインズ以後の新しい理論、すなわち資産効果分析（トービン）、狭義の流動性効果（マッキーン）、信用のアベイラビリティ理論（ルーザおよびカレーキンの貸し手分析）などを検討された後、伝統的な利子率経路に対する新しい広義の流動性経路の存在を明らかにしたのもとしてラドクリフ報告の流動性理論を高く評価される。先生はラドクリフ報告に対してなされる通常の批判、すなわち流動性概念の不明確さと貨幣供給量の意義の軽視に対して、委員会の流動性概念は即時的購買力のみならず、潜在的購買力への支配性を含み、これが各種金融資産ことに貨幣を含む金融資産の構造としての流動性の構造によって規定されること、および非貨幣流動資産の存在が不活動貨幣残高より活動貨幣残高への転換を容易ならしめることにより貨幣供給量が一定としても総有効需要を高めうるものであることを明らかにすることによって、ラドクリフ報告のもつ理論的意味を明確にされた。後述する先生独自の流動性ポジションの理論はラドクリフ報告についての先生のご研究の延長線上のものである。

貨幣の実体経済への作用根拠については、貨幣の中立性の条件を採り、その裏返しとして貨幣の非中立性の根拠を解明できるとされて、レオンティエフの価格同次性の公準によって支えられる古典的二分法の体系（伝統的な数量説的世界）の内在的矛盾をバティンキンによって批判されたのち、新しい意味での同次性の公準とそれを基礎とする正しい意味での二分法体系を構想され、貨幣の中立性を可能にする四条件（マネー・イリュージョンの不存在、価格の予想弾力性が1なること、価格の伸縮性、貨幣供給の中立性）を明らかにされる。しかし先生は中立性条件の裏返しとしてこの四条件の逆の場合が貨幣の非中立性

の理論的根拠となるとされて、これらが複数的かつ重疊的な貨幣作用の根拠となることを明らかにされる。

先生はこの著書において、ケインズの『一般理論』を中心に、それまでの貨幣的経済理論とその後の諸学説を貨幣経済の把握方法と貨幣作用の分析という先生独自の視角と方法に基づいて、きわめて詳細かつ明確にそれぞれの性格を抽出され、貨幣的経済理論の学説史的発展を統一的に体系化されるとともに今後のあるべき方向を位置づけられた。同時に先生は貨幣経済の把握方法としてのマネー・サプライ分析、国民所得勘定体系、流動性分析、マネー・フロー分析、ストックとフロー分析等のそれぞれの目的・特徴・問題点を詳細に吟味されるとともに、実物・貨幣両側面を含むより統合的な把握と分析が必要であることを示されたのである。

先生の貨幣的経済理論の研究はしかし『物価理論の研究』と『貨幣的経済理論の基本問題』に限定されるものではない。先生は『貨幣的経済理論の基本問題』の公刊後もさらにその研究を深められている。それまでの研究を基にして、先生は一方では、貨幣を含む金融的要因と経済実体との理論的關係を、金融分析と所得分析との結合およびマクロ・モデルへの金融的要因の導入という形で明らかにされ、他方では金融的要因の経済実体への作用径路の問題を先生独自の「流動性ポジションの理論」として体系化され、それを金融政策論の中に包摂されている。金融的要因と経済実体との理論的關係に関する研究は、「金融乗数の諸問題」、「所得乗数と金融要因——所得分析と金融分析——」、「マクロ・モデルと金融部門」、「貸付資金説をめぐる一考察」などの諸論文においてなされている。これらの諸論文によって、先生は所得分析が持つ欠陥、すなわち貨幣経済の実体的側面の過度の重視とその裏返しとしての金融的側面および実体的諸量と金融的要因との関係の軽視、を是正し、所得分析と金融分析とを正しく統合することを主張され、その一環として所得乗数と金融乗数との結合による信用創造機構の所得形成過程への導入を行なわれるとともに、マクロ・モデルに先生の独自の見解に基づく金融的要因——流動性ポジション——を持ち

込むことによって経済実体と金融的要因との関係を一般均衡体系の枠組みのなかで明らかにされた。そしてこの研究は次節で論ずる金融的要因の経済実体への作用径路の解明とそれに基づく金融政策論への理論的基盤を与えている。

## V

金融政策論に関する先生のご研究の成果は、「ふたつの金融政策観——金融政策の攻撃目標——」、「金融政策とは何か」、「ポスト・ラドクリフの金融政策観」、「金融政策の作用径路観の展開——流動性ポジションの理論——」、「マネー・サプライと金融政策」、「金融政策観の展開」などの諸論文に主として示されているが、そのなかでも先生が共編者となられた『金融政策入門（新版）』に所収されている「金融政策観の展開」において、先生の金融政策に対する基本的考え方が統一的かつ包括的に示されている。先生は、この論文によって金融政策観の展開をその方式・目標・作用径路・金融標的の4側面から論じておられる。

金融政策の方式については、先生は金融政策の主体たる中央銀行の能力ないし機能をどのようにとらえるかによって、中央銀行に自由裁量を認めるか否かの違いが生じ、金融政策の方式が異なってくるとされ、伝統的な通貨主義と銀行主義のそれぞれの特徴と欠陥を指摘したのち、貨幣供給が基本的・究極的に貨幣需要に規定されることを前提にしながらも、貨幣需要そのものが中央銀行により左右されるという意味で中央銀行の能動性を認め、その能動性に基礎づけられた中央銀行の自由裁量の政策の必要を説かれる（新銀行主義）。先生は通貨主義の現在版ともいうべきフリードマンのルール方式に対しては、自由経済の理念を説くものとして、また現実の裁量方式のもつ種々の欠陥や危険に対する批判としては十分傾聴に値するものがあるとされながらも、貨幣概念自体が歴史的・可変的であり、したがって中央銀行が従うべき永久的なルールは存在しないとされ、新銀行主義的な裁量方式によって金融政策を行なうべきだと主張される。

金融政策の目標については、その政策目標は時代の要請に応じて変化するものであり、現在においては、19世紀型金本位制および両大戦中間期にみられたような対外均衡、国内均衡のいずれかを一方的に優先するのではなくて、貨幣価値の安定を最優先して、その条件のもとに諸目標間の調和をはかるべきだとされる。

金融的要因の作用径路の研究は、さきに指摘したように、『貨幣的經濟理論の基本問題』の公刊以後、先生がとくに力を注がれた分野の問題であり、先生の長年にわたる貨幣論および貨幣的經濟理論の研究の成果が凝縮された形で示されている。先生によれば、金融政策は一定の金融変数に対する操作を通じて一定の政策目標変数に影響することを期待するものであるから、金融的要因の変化がいかなる径路を通じて目標変数に作用を及ぼすかの波及機構ないし作用径路の理論が金融政策の基礎になければならないとされる。

先生は現在の貨幣・金融理論には、數量說的傳統に対する革命としてのケインズ理論とそれに続く展開たるケインジアン理論、それに対する反革命としてのフリードマンに発する數量説の復活たるニュー・マネタリストの理論のふたつの主要な流れがあり、それに応じて、金融政策の作用径路の理論にもふたつの型があるとされる。その一方の代表者たるフリードマンは、資産選択理論による貨幣需要関数の理論的分析を基礎として作用径路の中へポートフォリオ再調整過程を導入したにもかかわらず、貨幣需要の利子弾力性輕視のゆえに、結局において古典的數量説と同様の結論に陥ったと批判される。先生は金融的要因の作用径路における貨幣の重要性を認めただうで、しかし貨幣のみが重要なのではないとして、流動性ポジションの理論を提示される。先生の示される流動性ポジションの理論は、國民經濟的流動性ポジションが総有効需要水準に積極的影響を及ぼす金融的要因であるとみるもので、それは富効果分析、信用のアペイラビリティ理論、ラドクリフ報告の「全体的な流動性の状態」の理論、イエール・スクールの資産選択理論、ニューリンの流動性分析など、ケインズ『一般理論』以後のケインジアン貨幣理論展開の諸成果を摂取され、それに先



生独自の見解を加えて構成されたものである。

流動性ポジションの理論を粗描すれば以下のとおりである。流動性ポジションは流動性の構造と流動性の量とを統合した概念であり、前者は、流動性の構造→金利構造→有効需要という金利構造径路とポートフォリオ調整効果を構成する。後者は支出者の支配可能な流動性の量→支配購買力→有効需要という支配購買力径路と支配購買力効果を構成する。他方、購買力支配量は保有金融資産の売却可能性とそれを担保とする借入可能性が完全との前提のもとに把握されているので、それが現実の支配購買力となるためには貨幣へ一度転換されねばならず、この制約の働きをなすものが金融緩和度としての貨幣のアベイラビリティである。国民経済全体の流動性ポジションは金融部門と支出単位部門の部門別流動性ポジションから構成されるので、有効需要を規定する国民経済的流動性ポジションは両部門の流動性ポジションをマーシャルの $k$ で示される金融緩和度で結びつけることによって構成されることになる。そしてこの国民経済的流動性ポジションは金利構造径路と支配購買力径路を通じて貯蓄・投資関係に影響を与え、経済全体の有効需要に作用を及ぼすのである。

この理論にあっては、金融的要因は貨幣そのものから、貨幣を含む金融資産の全存在＝流動性ポジションへ拡大され、それに応じて金融的要因の作用様式も、貨幣の交換手段機能のみの重視から、金利構造径路、支配購買力径路およびその現実的発動を制約するものとしての金融緩和度へと拡張された。さらに重要なことは、この理論にあっては貨幣の価値貯蔵機能と交換手段機能がそれぞれ前者は金利構造径路に、後者は支配購買力径路とその現実的発動のための制約たる金融緩和度の場面において働くものとされ、貨幣の持つ機能が流動性ポジションの中に統一的に位置づけられているということである。このことは先生の名目主義的貨幣観、すなわち貨幣の交換手段機能と価値貯蔵手段機能とを重視される貨幣観と合致するものであり、さらにこの流動性ポジションの理論が『一般理論』以後の貨幣作用径路に関するケインジアン諸理論を集大成したものであることを考え合わせれば、先生の流動性ポジションの理論はまさ

に先生の学問体系のエッセンスであると言いうるものである。

最後の金融政策の標的については、先生は金融標的に貨幣的集計量を選ぶか金利を選択するかは理論の問題というよりも経験の問題であり、金融標的としての貨幣数量の重視は数量説的見解の理論的容認を意味するものではないし、金利標的の重要性を否定するものでもないとされる。

以上のように、先生の金融政策論は長年にわたる貨幣論、貨幣的経済理論のご研究の基礎の上に展開されているのであって、それゆえに明確にしてかつ説得力を持つものであるといわなければならない。

## VI

矢尾先生の学問体系の骨格を貨幣論、貨幣的経済理論および金融政策論の各分野にわたって、不完全な粗描ではあったが、論じてきた。先生がこれらの分野でなしてこられた独自のお仕事の主たるものはつぎのようなことであろう。

(1) 貨幣の交換手段機能と価値貯蔵機能を重視される名目主義的貨幣観をとりながら、金属主義が重視する貨幣の価値尺度機能を名目主義の立場から独自の仕方で解明されたこと。

(2) ケインズの『一般理論』を中心に、それまでの貨幣的経済理論とその後に現われた諸学説を、貨幣経済の把握方法と貨幣作用の分析という先生独自の観点に基づいて、貨幣的経済理論の学説史的展開として統一的に体系化されたこと。

(3) 貨幣経済の把握方法を国民所得勘定体系、流動性分析、マネー・フロー分析等にわたり、それぞれの目的・特徴・問題点を詳細に吟味され、実物・貨幣両側面を含むより統合的な把握と分析が必要であることを示されたこと。

(4) 金融的要因と経済実体の関連をケインジアン立場から所得分析と金融分析との結合という形で明らかにされるとともに、一般均衡体系の枠組みのなかでそれらの関連を明確にされたこと。

(5) 金融政策論において、金融的要因の作用径路の問題を先生独自の流動性

ポジション理論によって総合的に解明されたこと。

各分野でのこれらのお仕事はそれ自体としてもまことにすぐれたお仕事であるが、それに加えてさらに強調されるべきことは、矢尾先生が独自の視角と方法、すなわち名目的貨幣本質観に基づく貨幣経済の本質的構造の把握と貨幣機能観を手掛りとする貨幣作用の分析、に基づいて貨幣論、貨幣的経済理論、金融政策論の各分野でのこれら研究成果を統一的・有機的に関連させて一貫した体系を築き上げられてこられたということであろう。先生は内外の龍大な文献を渉猟され、厳密な理解に基づいてそれらを自家薬籠中のものとされたうえで、その本質的特徴を再構成して自己のうちに摂取され、体系と呼ぶにふさわしいひとつの学問体系を構築された。先生はまた、学問に対するたぐいまれなる持続力をもって、40年の長きにわたり一貫して貨幣あるいは金融的要因と経済実体との関係を追求されると同時に、それ自体として論文の形で発表されたものはわずかではあったが、古典派経済学の研究に精進してこられた。これらの諸点が相まって先生の重厚にして総合的な学風を生み出しているように思われる。

矢尾先生は、この4月に先生が研究と教育に情熱をそそがれた六甲台の学会を去っていかれた。淋しさを禁じえない。しかしこのことは、六甲台で学ぶ機会をもった多くの人びとに先生が与え続けてこられた人間的薫陶と学問的刺激を弱めさせるものでもないし、先生の学問に対する情熱を衰えさせるものでもないであろう。最終講義において、先生は今後とり組むべき課題として、理論、制度と歴史、および政策を統合した金融政策論の展開、ケインジアンの一人名としてのケインズ経済学への反省と評価、のふたつをあげられた。矢尾先生のご研究の完成が待たれるところである。